

井上由起子

国立保健医療科学院施設科学部 主任研究官

「地域に暮らす」という概念の具体に関する研究

～都市型グループホームにおける事例調査を通して～

本研究は、高齢者福祉のあり方が、施設か在宅かという二項対立的な概念から、居住形態に関わらず地域での生活を継続することが望ましいという概念に変わりつつあるとの認識に立ち、町中に位置するグループホームを題材に継続居住の実態（外出行動、家族関係、自宅の意味づけ、住民の認識など）を丹念に調査することで、「地域に暮らす」という概念の具体像を明らかにすることを目的としている。

具体的な調査は、東京都品川区で初めてのグループホームにて実施した。当ホームは宅老所をベースに在宅支援型のサービス展開を行ってきた事業者が立ち上げている点、商店街の中に位置している点、利用者全員が区内からの転居である点、スタッフの多くが区内在住である点、家族の面会が頻繁である点など、地域との関わりを保ちやすい条件を備えており、調査対象として適切であると判断した。

このグループホームに50日にわたって終日滞在し生活の様子を把握するとともに、1年半に及ぶ外出記録をもとに客観的なデータを収集した。この結果をもとに、外出と訪問という二つの切り口から、如何にしてお年寄りが様々な立場（入居者、家族、友人知人、住民、都市特有の匿名性など）を持ち続けながら暮らしているかをとりまとめた。

結論は以下の4点に集約される。

1. 施設の中ですべてを完結することを指向せず、既存資源を活用することが基本原則となる。
2. 外出を支えるためにはホーム内での暮らし以上に個別性への配慮が欠かせない。
3. 外出には負荷がかかる。不確実性を排除するのではなく、負荷を適切に調整することがケアのポイントとなる。
4. 今後はホームそのものが地域の既存資源となる取り組みが求められる。